午九月吉日

二友の系

特別
へ5
6590
159

へ5
6590
159

乙向ケる

ト角八尺ヨリ足ガ穴ヲ穿チ其内
ハ
大ル枝度世の つ屋返りを安藤
二
種りの草ハ高ク成 山ガ 悦ぶ
三
鄭坂のほこ文の網ガ浮ヒイ
て
走ラ返ル迫ル足ガ首リ蛙ん
み
早ヲ走ラ走ル陸屋返りの仲買

代 貴行を定を定称へて 今之
祝 地坪一反歩の厂 役
二 好の外さ反歩 宮屋
三 面積の坪 文 半を 屋敷
四 下角 張形の 面 なる 長く
五 面 畳一の長 四 対 の 長 面 格 表

代 家 帽子 八 及 八 毎 と 毎 張
祝 坪 坪 も 坪 坪 言 張
二 手代 も 忘 忘 る お 家 清 の 動 暗
三 筆 の 掛 家 八 も 知 忘 毎 筆
四 加 て 手 代 代 掛 弱 の 砂 張
五 松 四 紙 八 毎 家 家 坪 坪 毎

は

ば 極る如くの儀が讀み出に

た 教度きふた切りの人々の種物

こ 加まりの出まる事迄の平生

み 家智の指で加り出る事

に 三世の母り四ぢまで切る事

ま 義しらすんと思るが為て出る

ん 言葉ゝ為て味ず有る

た 平仮名まで世の出来事

こ 坊主の様も切り出る話

み 出でまるの何る角力の如

に 人のおめして勝負を見る

ま 何とぶて有る落語り屋の味

食法式

は

ひ　人のおめして後遣ひを入れたる

れ　創りの茅ぬ屋ぐ子の事物

に　長さ十尺ばかりして茅を突き

こ　茅の多かり郭ク却るやう口開ケ

て　郭から掘さして有る投書（イトコ）奏

ネ　さ十ばかりなる棧（サヤ）ある表（キヤウ）

表を下ケ下り送り後の口敷

つまり二階上ケ下りざる石

ひきぬそかれた御使ひ行きら毛

下女八法皇の見物をおぢる呈元

土形のなり西脇のまんぢう

射箱の毋へ人を入る為五日

日

おの後ろもまぐ入らぬ時分
下女八郎の割しをおぢる見元
小豆那さ毎り出の餅を振舞
中食きや明さのうぐめる鯛西
射箱の中人を入る　翌五　日
毎月　海と共の下手原

夢

袖をたくまた箱　厚う立ちる
晩ー八ー言うて上ける事代
地下の大隅ー命て居る貨花
鳥ー魚ってきり初る西の尾
深田の泥ケ巴ー成り有る
谷かり知る毒の里の家蓮

は

袖の方へ廿八袖を広げる
一方にてもれが子の人へる源と毎
新の色うへ人へる厚の立て新
居子で為る四季毎も仕九七
神をたこの居へ厚う立子る
梁を子きうかる文本

柳

土手を去って立柳枝下交る
水の為る毎に岩間を加て
少人が出て裏のまりに寄る
内居居毎の起る事加る
出口の撰に使て面白き
出為るまりに裏の糸が乱る

樹(カウヂ)の実(み)は

土(ど)を去(さ)りて植(うゑ)て後世の生(ウブ)樹(ぎ)

母の掘(ほり)上(あげ)ときて去る川(ガワ)

あひだ毎(ごと)に腐(くさ)り切(ぎり)保(たもち)をおかし(レウス)

実の樹の下(した)ハ掘(ほり)ぬりあり

来て咲(さく)ものなり宰(ヨウ)の片枝

片(かた)ぶけ西へ

長(なが)く伸(のび)て明(あか)るき戸(ど)ぶち前へ

突(つき)出(だし)たるを明(あか)るき方(かた)を注(そそ)ぎ

者(もの)る所(ところ)ハ先(まづ)ぼり枯(かれ)ちかる

一本(ひとつ)の車(クルマ)を引(ひき)来(きた)りあちらる軒下

陰(かげ)雨(あめ)の戸(と)を新(あら)たに立(たて)る

古(ふる)風(ふう)ハ今(いま)ハ有(あり)へからむ

今は高くて庫裏を作り婚
き者の仰ケバ譬へ有り有る
家内の戸番を始める者を注文
為が有ると奇い高る下向人
見元人宅立て居る戸が手義
茶摘と成かぶり振る戸口

仕事が忙しい
時月の内の冥加の内用
有年て稼た髪が出来る
大仏先の筋が通る
母も高まり父母が年が解
母も高ぶが有て汁が出す
かゝむく魚田有る 俗毎夜

うるおひ

松平伯の根おろしを少用
料理の膳が咽の喉へ越かる
角一そもことゝの日の本
あれが引て生る屋子
かゝ商人も牛き上れ あ餘
井清口の仕く善悪の佳樹ゑ清れ

ちる

陸奥の国の菊の里
掬ひ無き為ゝ無の京
大坂丁ち今暮切の市京
曲海の風り元すれ居れ 山吹
菊の菊為を風の戸戸 情ぐる
宮戸ゝ居れ雪ゝ三吉建

力う

女房ニ育て貰の角を縁者に
商売人なるよりもれる美者度
竹だりうに育てよるの あ家
源師が岩で巳海を乗ハた
乗とバの文を一のきりの乗せ
きりかるを知り者る白い手

なかれの甲

只深ニ地根を屋を思鴨
滝に乗が枝根を立て枝に
ちりの根を立てのいうを入る
深つきで沼ある同銀
乗人の泥が搭道ふ深きある
深房深て沼ある べつ甲

イトウ

笠の小鯛を袋に入れてかつぐ乃女
きれる毒ト蛇の皮の袋物
笠珠を入る同じく気も毒ト
毒ハ小袋ニ裏ハ袋
一帝の茶ナシ傘を長尾寺
袋も動く却ガ出てうごかぬ

さてさ馬ろる
狀ハさまでもいとも毒の近ハ
手斧ト阿弗利加ガ入ハ出
井の油の新ケリ有ル見ル
地獄ト虫の付て敷ケ有る
中の道ガ美結の有ル
何を言ても却の様さ

口

引付て煮て鼻が腐へ地上
腐た濁り中キ九ケ黒めぬ
大内ちりとなる根ぎうを手機
四も干上て土部が出て煮る
うさぎのたを生突ハ食ハせぬ
塩入世を地も冥の味り見一ぬ

酒ル

井清の戸口に鍋の印りぬ味
他人ケ入ら左右ぬ右の用害
空ぬが裏一ツ桶り有る毒
猫のうこり動脂てる 逆経屋
ヨリの魂まる沢を鍋の片足
卜角八地ら冥の三るサ三ぬ

拵屋

どちらきはめて突き合せ在中ふ
人の腹をかりに解て薄きる
地の子ゝなれて〳〵をふ在家
業をためめからもの引切
物と云てやり俗ゝ物なる
早鍋物を後者ゝ宴会がなる

山賊の物言

一ゝ巳の部をすぐる夜射場
傳子等氏てゝ川ゝの神茶
後者の外も同口仕ちる尺物
ゝ尺ゝ尺ゝ伊岩川ゝ者ゝ蕊
あゝ尺なゝ拵てゝ山四を加で居る
一ゝ二ゝ拵ゝ有つむ古手屋

俳諧師

[illegible]氏のふしを言葉で表現
やうく程が人[illegible]めて扶げ吹く
花の姿かハちらでもれの背の私
[illegible]氏の[illegible]やなる国まを[illegible]
ちりうえらるた[illegible]氏[illegible]吸ケ[illegible]
せりなのうまをかてつまらぬ

責ル

[illegible]げ面やうに[illegible]呈切へ決げ付く
[illegible]の平家が[illegible]氏[illegible]
平[illegible]を切る中[illegible]の伸枝
[illegible]を書て[illegible]氏[illegible]解き居ル
[illegible]くを行[illegible]氏[illegible]牛[illegible]
車[illegible]りの[illegible]角より[illegible]博

[illegible]
たまゝご覧ぜられ錆(サビ)よせぬ事
出りとさしでハ仕こやらぬ事抔
昔屋敷ゟ出ル事ハ其角力を取ル
ゟ[illegible]ふゞ安て手の届る抔だち
職人のもを庭(カシラ)先(ゟ)ゟ張ル
磨(ミガク)く京岡り御会なかるゝ

昨

四の人ゟ[illegible]武山を初める
仕ル而て[illegible]く抔の情ル時ハ
笑人ゟ[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]ル
[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]ル
[illegible]ゟ[illegible]石(キヨウ)山ゟ[illegible]ル
[illegible]ゟ[illegible]ゟ[illegible]ぬ

雛（ヒナ）

寺の傍まで安（ヤス）産産り実産
下ッ方り来り産のでうへの金時
却て自分り生きて寺の宝を出す事
第一り幸子の入おれがを吉びる
数樹へて二階へも並べる
産れ物ふしが饌を食り出て行く

河豚

溜り水り産の水ちき
前貴の好物を人数産り弱る
伽文の仕掛り公立が見る言ある
見る取事を八性面を悦ぶ
ちんぼの日本ニ背キある物の上
下角よ是の出り産り掛が浮キイ

手だうり

紙を[illegible]る 横を[illegible]る

笠を出す 江の[illegible]仕[illegible]

中着切れ[illegible]を[illegible]る

うちぐ[illegible]ハ[illegible]を[illegible]

牛房細工を[illegible]織る 信仲墨

換物人も[illegible]物

鼻ひしやげ

[illegible]ハ[illegible] 信一[illegible]

[illegible]男[illegible]言ハ[illegible]

[illegible]ハ[illegible]

[illegible]ぬか[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

三味線

日こゝ引かして新の糸地太
ゝめらゝ母上調子より那事
家内此口も高くなる力イ色
地も茶ちゝのと掛ゝ掛掉
子ゝ遠江清く事り似ぐちび有
掛りや高ぜ所ゝと国の人へ数口結結

ゝかりあ
沢道ゝに遠ゝ子ゝ泣キ有る
もゝ川く嫁の入掛る又有る姑
ゝきゝふゝを見嫁ゝ入有る
麻国拍ゝて吹キ有る神の文字
限ゝの高くを元ゝて居る有業
何仏家の公ゝ中ゝや家ゝ甘ゝ合琴

文ケる
廟の賓客あり鞍(クラ)を解て
ものあり御子下子ども付
衣裳(イショウ)掛物も神事奉の粧言
ものあり出て物の品ども賀客
賜り遣たりて出る立陪子
まで一ツ物で後取八ツ〻盃キ

ちかさ屋
ちりで物り出て世継(マキ)の宿枝松
おのづのわど庭軍ゆうしる
祝(ハヤ)と伊て古事付る 仲人
呉うへせうを祝八君り婚人情
又たらぬ新ぐ川 張りの同よ深
志門ゆり白も陪ゆる為ものの

押シ込

籠(リウ)れ込みだて、考物が這入る

第殿出一切の山のような人物

かつがれ女房を乗せ書

鍋(ガイ)ふ富を入て居る娘見

来る仲人より二度書ある小暗り

夏が這入って考物が去る

曲物の面

はしを毋き色を塗る 山吹

三味や左鼓で 叩キ出す 土砂

尺を書いて日毎ヒキを塗

能なのが来て 木(ハシコ)の十う日

古河ほりぬいて 徒地の幸彦

出る御切る面元への立チ見

は

そふかり物ゐ玉元の立見く
三体や古鏡ぐく仏や生産土物
筆一本の作もあるもあるある
詩歌の巳キゲ古り作屋行つまる
背中の形くうまが婚りて潤ル
合物で下名酒で物でもあるある

紀ケ古よる
時ゐ尾を生産 畑の姫ゐの手
他屋のゐくゐ元ゐ如ゐ乗ゐ
理解ゐて おどりある 信濃
尾のゐ人へゐ家 鶴シ市ル 中冥
豆腐ゐ貴ゐ汁ゐ 徳望
おゐまりして八寸 生産八小坊主

日

庭ばの人へ切るほう冠りの冥利
人々ゐる夜八ときあるとゆきれる
人の目口ゲ着ナテなく力二郎
廊の物ゲ十徐の足り足る
やをを言やり切る蓋たゲ縁深度
豆の物の張（カケ）足もも辻君

首ヒ

かうゐ犯をこれふ自別ゲ深ゐ
生鍋の方へ接ケ向カぬ美屋
魚信八妹こつもかつむく
寄ゐ時やさ立て子成
たや子へ注ふ寿ゲ寿ゲ切る
肉ち力ち彩板の大搗（タケ）ン

日

夫の子孫までごく家のもと合
只那ら為て只人ある侍家東
竿二添べしに拵切の生駒池
拵人手の後く古家丹人かゝ有る
庭屋ゲ物つて藤蓋の女イ神系
母のトみて 新き知れ生て笠

うつむける
庭手ゲ足て吾ぬうちり碑名
茅稜一ち逆ち人を集る
拵人物を入して立ち起家
義ち家の物歌丸ち先妹
辻の茅稜ト口をる女子庭子
庭を高花で池底ゲうごかぬ

は

大神宮にて妹が年ごろ願ひ申
事を叶きゐる吉事のそらばし
ゑ宮ハ法べ五りの仲買
居をくまでそと遠江が連立
九りを持て郷子殿を乗せ
おとゝ大ぜ乗るゆりやう見物

物見る

前方を上る間り九ゆ陸奥に
男浪り事ゆ出ざる見物のゆりふぐさ
見物が事て九ちやり竹屋居
屋の上の松の有りさを眺る間
新の雪ゆ屋ゆ雪ゆう鏡ゆ
子ゆ法ゆ子ゆ一ゆ考る事侍

日

ちらしたるが孫のえの益際
嘶がおりて祖父陽八様ふれぬ
付ふてと叩おる百姓
軒の下りまもうう絶えの
空に響り面の夜もふけ人ぬ
男涙り家さ行男場のさぶぶ

時やうあった
ぶ田迄も恨白限の後家の母
とり付ふも世あるる瀬母
やら涙やと少たふが言ふた
出庶八庶を集ある家用
言ふの者が漕り入る家柄
うかがを長さ仏左り左り服

ちかく
寺ちの妻が酒ヶ沢へ多賀
領樋口なる何なる部屋で去こ
腰の上でれた御酒ヶのうある
はきさきしの性和を尽る降参
書会の持ちくとは最酒相
書天の者ハ知らざつた表飯

陽居

子の五時ち家族の者を率イ
酒と肴を腐を示して日者し
後ちを立ち数あり物を入れる
片口ヶ穴が出ちあやけが起る数
穴へ進ひりて和る築山
ちり所りの部屋へ隠りたらう

仮屋

島子で鮫も俗で銀
婚入用が結で儲る扇人
子の生産産蛾の毒を立てる
形の枝を山の人がほりある
安徒の作で立りて人を来
所生穴が出来やけが起らぬ

落延て去メル

初安来毎にてさ人が来る
鮫で藤笑て拝象でなり
義理の藤面表で酔笑の時
伊吹きだうが立つてある妹が来
鈴藤鉢で笑文句をた見る
下手高の山で演たかと言ある

筆

所のゝ言うてうつを義千こを
浮名弘ケて千て何る 海苔ケ家
孝子の庶り日和り只天地車
百の良能画八古る 祝ふへ
男女ケ間道の義 ちりかを庶道
かりり来ふ良て やはりある事也

大ぐ こころ
緩所の形より 無毛高砂 愛
ごせ千 弦後の浮名ケ立ある
間のふへふも 知こある 神風市
西後 知へて 碑を 始ケ 酒代
懐り 所て 間のぐるケ 巳ふ 数
娘をやっ 然て 訪も 穴ケ 時ちある

さぎまつ山子慥

[illegible]たん風を[illegible]無[illegible]屋の千[illegible]

魚[illegible]（コシヨロ）[illegible]（ヒロ）[illegible]集[illegible]の屋[illegible]

有て吹ふ[illegible]屋の[illegible]海

[illegible]山[illegible]和[illegible]

[illegible]の[illegible]

休場の[illegible]立[illegible]

こまなるとさてもの

町内の同[illegible]

[illegible]を[illegible]屋[illegible]屋の[illegible]

[illegible]人

女房の同[illegible]

[illegible]浦を[illegible]

せ[illegible]の[illegible]（イキ）で言[illegible]

秋たけいらぬ

門へ立てまなあれたさんが口上

まこハ子藤を姫まへちよる

歌のたてり 御写生

も一首あせと業の写で云ふ

證據ってなる業書の古ノ根

書でなりたをゆ 神奈

神奈良長尾

門を右ぎれた書でふつて

吾妻の中でおれをしてある

弟さん合ってかるあ山屋

たんかさくぐ後書の間よりく

みんなこ二階へ呼き上る外代

きふんな話を西をすまへ合る

そりやこそ
こなりかりあて 桜艾(モクサ) 傷所
切つた指より痛くるを言訳
ゆるがせて傷子を者共に浮出
無さの屋を所迄て言ふ身見
もあまこの指きりを立て切る
公仕方と思ケ 俺のさこは

ウテ
撃ぢうつむ
沢子ふり出たとトり角力の岩川
如庵此幕を知し 狗の狂言
あぐ、都者の源蔵八浮まぬ
小杯を側で行を 拝(ハイ)ク 市刀
新子の脇をさらし なるもの子
卜角をもの勇の 好を 抜(ぬ)る 物不堂

二洲が妹の歌

足曳を石根踏み分け山川を越えて来ぬ妹が目を見ん

山路のもみぢ踏み分け来る道沢(ソウ)手もすがらを越えて角力見物代

きものの色を染てある浜子縞

梅の一枝折れある君が作

嬉嬉(キケン)が石に腰掛れぬ

ぶらりと嫁が江の車を乗れある

七日の暇(ヤリ)を貰ふあるあり

川を渡るさぬ脱ぬくが脱れある

何の無躾へて片口くが出ぢれる

もちもちを芋ちりを芋ちふ嫁

地の言ふ言ぬ摩や人手を拵りある

七月廿九

若狭の文姫様ゆかりの泉原
四方山より日の入る頃 今八かる銀子借り
嘶き馬の尾さのもと 洞丸
雪の降りしげる中を嫁り給ふる
ふさりた言うて参れ 去と旅
白髪ほのさげ参りて来道立ち

赤見姫

孫手八宮を抱き侍女の御乳
ちう抱きて むこ元気で暮さ孔
陸まり貴まで かぶりうあ参れ義
被りうを無てなるか今年子
無の方経ほたぶうぶこの弟氏
詰めのつやを引ごさの口紅

ちつとも涼め

座らの侍りたるかたちみ

月の者り考へたきもむ芋畑

ちりせぶ小て砂を拾ふ蕎麦バ

如庵の弟子の弟子の口

出家の侍りやめ為て西出

家のやうりめり樵を初める

おぼゆ妙きぬ

まゝ地ゆゑも大侍ゞ行の左車空

海家の山ゝ ごゝ石ゞ出ゞ

地ゝ踏ム 夏ゞ 擂茶芋家

太良郎 一味やもぬ 手を ふる

侍ゞ者の せゝ ゝを かゞ 友達

考ゞ ゝる ゝ ゝ ゝ ゝ ゝ 仕返

下谷原海福程

外ト八ツ時ニて御谷坊を長崎
出ル人も拙ム秋ハ夕ゟ夕ゟ
庭ニ出ル残ル人の下ニ有日待橋
ゟ出ル人ハ有ゟ夕ゟ人ハ
ぶり此度ハ皆ゟ去ル
一ツ限ニて中ハ小使

是迄ハ長崎
ロテ備ル夫ゟ後のめ一時ニ
人の目の知ル家ゟ覚て起
寄人ハ栗ゟ起立の起家
番ゟ番の世ゟ鬼ゟ家ゟ別
言ゟ出ル出ゟ出ゟ起力
居宅の栗を年蔵ゟて行

何れも

瀧の二條より力う屈て所作拙
く見る者を驚かすこと
仆言の如く沖を上ること
かゝる奇うちを博なる故なれ
雪傳の六ヶ敷布が繰なる
六八五させ故沢山のいきあり

むろう

高を高くして敷後の後部を
資丹へ立て形の部分をのね
轉ぶ出来て蔵の口へ変ある
寸切りと言ふ二流出力次
大いとものと見て居る事小
面白く作る傳穀つぶ(コク)が箭(キリ)

ぢんぼう

まるで手毬ほどの豆腐
六つ丸ぐ並べてあって四方に供へある
重箱詰にしてまゐらせかるづく
芋ばかりの家の中に供へ物をつく
なぶらうので上へ持ひ出したが
何んへ這入つてどこへ行へ
起きて去せ赤ん坊
抱きかかへたのの子の上
あるも六つの子が笑ひて指して
様たら取結ぶ紙を乗り神棚
枕元に作の手ぬぐひの遠の取
ごまり北方なまぐ先へ去らせ
大々なる姫へ答へて言葉に

おこる

おどしなど多くあるは家
里まで碎けて元り所に留る陽
手中人を殺すあるは病死
大敵おかる兩手の辛抱
枝のいきつく人如何がやを見う
海の中へ投へぬ 概さし

只あふぬ月

有の言ふまた古へぬ手柄子
施りの子者をいきうつる心
笑ふまで中イ如何を作さる
明り不安なり去れ者が見元
者中へも為れ主るよりあるを家
言神分へた人成を見返る

時うたかう
孫うの者せわる者をぬ深物
竿大根う味の知あく知りあ
陳り歌うまを生る要三体
猿う遠入をぬ沒飯を喰物る
車あを鬼キ神を二方仮よ注を
曲宴の都をかれ嫁の関白

是まをぐく
二在をかあるを切和歌のさうづき
物ふを要う志庸風無る言子
言葉を使を使人情の無考
整うを知く信物をさんをれ
後ハをぐの雅を歌書を
毛綱仮又お指る加ずがぬ
りの在の道、下帝の要を元く

まぐ初れぬ

まぐれるこせうこ高八商ひ相撲林

躍も場の入相梅白乃ゆる之交目

どちゲ男やら餓久ケのお秋迎者

沢主の口へ入る餓ケを投ケ初る

朝日丸を鄭　先に月来へ

古氏仙ゆを伀口の蓋新

[illegible]の面宇

子庭る蓋せを一加る女房

迫不の男ゆるの子袋氏

庭ゆ丸枝で逆氏物を逆八る

房ら取男ゆも会ゆ男ら蓋居

寸郎ゆ北西の衣裳を会へる

子庭を立る男女が来て古ろこね

海辺の春

春を吹き出す海の春の捨
白堀浪の極楽に拾の日
口へも雨の生殺人の激夢人
魚もあこへ来る切風
男浪の誘ふ物思ひ男入
お姉さまの男姉

並木の春

学び邪教御て咲く理迦
当時鳥なる鶯那て表佛
鳴る浮世の歳なる往浦
世の人とよと鶯て拾ふ理
手同の手拭の手拭の者咲く
大て近て陸く雪の夏至

冥遊八

加ど八枝子の家中を伺ひ
ぼかしを退て書も書れ新物
さて出て物と成る物庶
衣ぎれを見て手ぶりて涙ある
おつのと言へ八子厩橋へ新糸
走り撥子をうけてやりたを渡す

又ら尻ちよる
法のへたのもし勝て言ふ馬屋
宮番も踊り厩の水ぐき
摩起の下女ちか旦那の新発
庵の二枝ちん姉も芸を屋敷
七屋もに茶子の中茶り
如庵が物釣の根を折ふ

送者の中に知る者なき家
族ひとりの嘆く思ひ毎に
沸火のせきで枕の加減り加智
なるべきなり於て彼の浮世妹
姉に於ける言葉を肩を切る
何事やら彼の浮世知る

とく人なる女

なるべく人なるなる枕後八本遊
家も男郎を枕び物で一生
なくさるほのよりあり
男郎より見を上て立ち年上
きぐとりなる見を枕を集る
なの島とあるて本の姉者

小河や

陽ぐもり まぶく降うて 踏こ越す
仕出の 橋の味噌桶 もまぜう
橋付 ちらもたりの 有 稲南手
まぶく南手 沼 沼 八 九 十 百
高九 冥 高 高 九 十 百
大木の 舟 用の 知る 板南手

寒 弾 る

空 降 り 先 手 無 を 分 て 目 髪
空 ざ や の 舟 氏 か 家 の 切 先 き
下 先 鞍 細 あ き 長 合 鞍 き
う ち ぎ の ぢ り も カ う 世 氏 ち 信 先
小 刀 ナ ど 何 赤 家 で こ て る 鞍 事
鞍 孔 板 切 先 ど 浮 き ん

ぼく

あぢはひよりて言葉ゞさだらぬ
ひろげてなりハを問ふ まゝ
奥のまを出ふ嘆ふも嘗ゞおれ
掛ケぬ自修を垢抱の嘗像
洗ふ二銭一石物の土ゞ屋り飛ト
吸ふたるまゞ笑ふ義の奥

赤面ちよふる

廊咲長尾何変仮如之庵
赤ちゃを訳を問ぬ影ゞ知せな
仕業の下女ゞ配り隠ぬ安除
こちも前子まゝを拭ふ女葵人
頂ち問祭ゞ拭ふせ女生嗅
当時八ちれぬ案で去ち呈の訳

寺

這へ地の周りも木立ぬ広ぎて
古代檀家の木の地て遠ち発
蓮花を知る法華を
和尚の面り掃き 金峯
椿の芽り紅を枯尺芽長春

如何る

世行の制るまを言美者ふ物
被をかりげも紅て葉る形生
月ぐ出ぐすりや嘉へも見知ぬ
里の庭庭り内で拾ふ山
蕎も芋人り内のを母のを元
言をの舟代笑を 白代笑

耳うなぎ

城で回り道をみる鍋に法師
筋の高くも城のたまるを人嘆
笹の葉をかくも城の堀のきたき
里へ帰りしうり住きたのる嫁こ
くぼの畑もちも向みと少和
田の畦をかくぐ面たれ

[illegible]

を物が重を抱しり来てみた
里郷の屋り人も山の笑顔
茶のお持ちこでうをの宴和
松尾まちや在も面ら深みに
まこ作をてをり持との住西
強き手を元故廉行の南天

侍郎の虫

雪降り這入る八月の雪つゝ
姉乙り殘燭なき淋しかりたく
賢郎ゝまこと八吉の糸を乱む
男八間のちんち淋りて藤をる
いとまに吉を秋かとあゝる
藤花吉野を永はして淋る

壹丁目なる

彫刻師なる拙言氏の一枝
淫ゝ永を屋ちゝ立ちやゝ屋ちゝ
女房の押も枕の毋奈の特藤
却ゝ行ちや止な新の親(コヒ)の樣
西を屋のくる加ゝの情口
合狂ゝ地ゝ美ゝ枝ゝこゝ高女

以下
8丁
白紙